

論文審査の結果の要旨

論文提出者 内藤千珠子

内藤千珠子さんが提出した論文の題目は、『物語と暗殺— 関妃事件から大逆事件を貫く近代の背理—』です。

本論文で内藤さんは、明治期全般にわたって、複数の言説領域を分析の対象とし、明治期を支配していた物語と論理、さらには、それらを表現する際の比喩の機能を明らかにしました。内藤さんが対象としたのは、新聞や雑誌における時事的な記事、医学・衛生学・人類学などの学問的言説、法律の言説、外交文書、思想的言説、そして文学的表現などです。多くの資料を精緻に分析したうえで、内藤さんは、異質な言説領域であるにもかかわらず共有されている物語の類型、価値評価や分類における論理の類型、そして比喩の構造の類似などを抽出して、その時代に特有な、しかし潜在している思考様式を明らかにしていただきました。まずこうした本論文の方法について、言語情報科学専攻が新しく提案した「言語態分析」という学問領域の、基本的ディシプリンを構築した成果であるという高い評価が与えられました。

上記の方法に基づき、本論文では、第一部において、病をめぐる比喩表現が、民族・人種・階級・ジェンダーをめぐる表象の中で、明治期特有の差別の論理をどのように構成していったかが明らかにされています。伝染病をめぐる比喩が「支那人」に対する民族的差別とつながられる際、身体の内と外が、国境の内と外に重ねられることなどが、比叢柴三郎や福沢諭吉のテキストをとおして分析されています。また「皇后」「娼妓」「女学生」といった記号が、常に「天皇」「軍人」「学生」と対関係に置かれ、「女」を血を病んで存在として表象しようとする欲望の中で男性の理想化

が行われ、「国民」像がこうした性差の表現をとおして形成されといった過程が明らかにされています。またアイヌをめぐる表象が、こうした病と血の比喩で語られることにより、北海道に対する植民地化が正当化されいく論理の形成についても言及されています。

第二部では、朝鮮王妃閔妃暗殺事件の報道を、その前年に起きた金玉均暗殺事件の報道との関係で分析され、マスメディアの報道自体が事件への欲望をかき立てていった過程が明らかにされています。さらに閔妃報道の記憶が繰り返し呼び戻される中で、日露戦争期の朝鮮半島に対する植民地化政策が正当化されていき、こうしたメディアの中における比喩と物語が、「日韓備命」への地ならしとなり、国内では「大逆事件」の思想的前提を確かに提供していったことがあとづけられています。そして、こうした一連の韓国王室をめぐる報道の集積が、どのように明治天皇の死と病をめぐる報道と形成していったかが、植民地支配のイデオロギーの構成過程として分析されています。

内藤千珠子さんの論文は、全体としてすべての審査委員に高く評価されました。第一に、従来の歴史研究とは異なった「言語態分析」に基づいた歴史認識と叙述の新しい可能性を切り拓いたこと。第二に個別日本の明治期を対象としながらも、近代の植民地主義の世界的同質性を明らかにする普遍性を持ちえていること。第三に植民地主義の形成が、マスメディアによる差別の境界の国民化と結びついていることを明確にした点などが評価されました。

他方で、複数のメディアの質的な差異への目配りが十分でないこと、理論的な枠組全体を、これらでの先行研究との関係において明確にできていないこと、メディアにあらわれこたない「声」への言及が十分でなかったことが批判されました。

こうした批判点に対し内藤千珠子さんは審査会席上で、今後の課題も含めた形で、明解な応答をされていました。したがって、本審査委員会は、本論文と博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定しました。